
平尾雅子門下生 ヴィオラ・ダ・ガンバ発表会

2026年6月14日（日）14：00 開演
於：霞町音楽堂

第 1 部

1. 作者不詳：王のパヴァーヌ
スザート：ダンスリーよりガリアルド／パヴァーヌ〈千々の悲しみ〉／ロンド／戦いのパヴァーヌ
Anonymous：La Paduana del Re
T. Susato (c. 1500~c. 1562): Gaillarde / Pavane Mille Regretz / Ronde / Pavane La Bataille

Tr. 井上樹 Tn. 橘直貴 Bs. 山田郁子 Bs. 坂入健司郎 Perc. 砂川巴奈歌

ルネサンス舞曲がお好きな方にはどれも皆様お馴染みの曲かと思います。坂入さんは昨年から平尾門下に加わり、今回が初コンサート&初発表会です！僕が高校の部活で初めてアンサンブルをしたのがルネサンス舞曲でした。初心者でも合奏を楽しめる曲を考えた時に、それを思い出して今回のプログラムになりました。少しアレンジしたり、打楽器を色々と持ち替えたり、譜面はシンプルでも奥の深い音楽です。（井上）

2. 作者不詳：鳥の歌
Anonymous: El Cant dels Ocells

青木良枝（Cem.辛川太一）

鳥の歌は、スペイン・カタルーニャ地方の伝統的な民謡です。クリスマスキャロルとして、またチェロ演奏の人気のレパートリーとしても知られています。キリスト誕生を祝う曲ですが、純粋な喜びだけではなく、時代背景を感じるような少し薄暗い風景をイメージして弾けるよう頑張ります。（青木）

3. ボワモルティエ：四季より 〈春〉

B. de Boismortier (1689~1755) : Le Printemps ; Première Cantate à voix seule avec symphonie
Récitatif / Air Louré / Prélude-Récitatif-Doucement-Récitatif / Air Gracieusement

Sop. 青山比呂乃 Ft., Rec. 杉山容子 Vdg. 渡辺マリ Lut. 矢澤勝之

このカンタータは四季の春夏秋冬の中の春の部分です。レントアティフとエアのセットが三つありますが、今回は二つ目のセットまでを演奏します。

一つ目のセットでは、北風が止み、フロールが地を花と緑に変え、春の再来を祝う。小鳥たちは歌い、エコーが聞こえる。

二つ目は、喜びに満ちたコンセールが聞こえ、羊飼いたちは踊り、愛の神はその矢で恋人たちの心を結びつける。(渡辺)

4. リヒター：チェンバロ、フルート、通奏低音のためのソナタ第1番 ニ長調

F. X. Richter (1709~1789): Sonata No. 1 for Cembalo, Flute, and Basso in D Major
Allegretto / Largo / Presto ma non troppo

Ft. 柳沢正臣 (Vdg. 米山水浦 Cem. 平田恵)

フランツ・クサーヴァー・リヒターは、現在はチェコになるモラヴィアに生まれ、最初はオーストリア、次いでドイツのマンハイムに移り、ストラスブルグで亡くなった作曲家で、マンハイム楽派を代表する人物です。彼はバロック音楽の様式的特徴とギャラント様式の要素を結合させてといわれています。演奏するソナタ第1番ニ長調は、高く飛翔するフルート、和音の移り変わりを雄弁に語る弦、鍵盤の動き、といったそれぞれの楽器の魅力を引き出した曲です。この曲をガンバ弾きとして一度演奏したことがあるのですが、そのときにフルートのパートの美しさに惹かれて、今回平尾先生にお願いした次第です(柳沢)。

5. マレ：組曲 ハ長調 (第3巻より)

M. Marais (1656~1728) : Suite en do majeur
Prélude / Caprice / Allemande / Double / Sarabande / Sallie du Caffé / Double

宅間かおり (Vdg. 米山水浦 Cem. 平田恵)

前回弾いたオルティスは大好きな作曲家。今回のマレは憧れの作曲家です。先生に「3巻から弾けそうなものを」と言って頂き、今度は長調が弾きたくて、そして読みやすそうな C-dur だったので選んだ組曲です。いつも課題だらけですが、今回1番苦労したのがイネガルです。学生時代に「バロック時代の曲には付点を付けて弾く事が」と教えられたのみで、まさかこんなに複雑で汎用、不定形に思えるほど捉え難い奏法だとは想像もしていませんでした。試行錯誤するのみでしたが、手の内に入ってくれた感覚のないまま発表会が近づき、どうかご笑納くださいとしか言えません。

ところである時、「世界中から戦争がなくなりますように」との一文が添えられたかわいいうさぎさんのイラストを SNS で見つけました。この絵の作者はその時にはもう苛烈な批判を浴びて謝罪をし、SNS をやめてしまった後でした。戦争のない世界は人として共通の願いです。それを描いた事で鬱病を発症するまで追い込まれてしまった絵描きさんの心が、また自由になれるといい。プレリュードとカプリスを弾く時、ちょっとそんな事を思っています。(宅間)

6. ボワモルティエ：2つのヴィオルのためのソナタ イ短調 作品 10-5

J.B.de Boismortier (1689~1755) : Sonate à deux violes en la mineur op.10-5

Doucement / Courante / Gavotte / Lentement / Gigue

山田郁子 森田彰子

多作家で、器楽曲、声楽曲、劇音楽と様々な音楽を作曲・出版し、経済的な支援者なく生計を立てることができたボワモルティエ。

《2つのヴィオルのためのソナタ集》は、ボワモルティエが30代半ばの1725年に出版されました。優しく美しい歌曲のような旋律の Doucement、色々なキャラクターが登場する Courante、重厚な響きの Lentement に惹かれてこの曲を選びました。2つのパートは、カノンのように絡まったり、呼応しあったり、下パートが通奏低音のように上パートを支え重厚な響きを奏でたり、様々な変化がちりばめられている作品です。(山田)

7. ペープシュ：カンタータ《愛の神は美しいマイラの瞳の中で顔をしかめる》

J. C. Pepusch (1667~1752): Love frowns in Beauteous Myra's Eyes

Sop. 佐藤ゆかり Rec. 草野ひろ子 Vdg. 内山哲 Cem. 安部佳代子

ペープシュは、ベルリンに生まれましたが1700年頃ロンドンに渡り活躍したことから、似たような経歴を持つヘンデルのライバルと目されることもあったようです。歌劇や宗教曲の他器楽曲も多数手がけています。「古楽アカデミー」の設立など音楽学者としても重要な存在でした。器楽においては特にリコーダー関連の曲目が充実しています。今回の演奏曲もオブリガードパートとしてリコーダーが指定され、声楽パートと同等の重みを持って作曲されています。歌詞のおおまかな内容は、なかなか微笑んでくれない恋する人への求愛を歌ったものです。(内山)

8. テレマン：トリオソナタ へ長調

G. P. Telemann (1681~1767): Trio Sonata TWV 42: F9

Allegro / Affetuoso / Presto

Rec. 原島みちよ Vn. 池部克彦 Vdg. 池部裕子 (Cem. 加納文子)

3楽章から成るトリオソナタで初版が1710年頃から1750年頃とされていますが、出典は不明です。楽器編成はリコーダー・オーボエ・通奏低音で、ヴァイオリンがオーボエパートを演奏します。

私達のアンサンブルの今回の課題は“何をどう伝えるか”です。1楽章の温かみのある優しい雰囲気が入って選んだ曲なのですが、「なんとなく春っぽいね」というイメージだけでは、何も伝わりません。先生からのアドバイスを参考に楽譜を読み進め、話し合いました。出だしのフレーズはへ長調で柔らかに桜色の花が揺らぎ、蝶々が舞うような3連符の繋ぎでへ長調へ。続くフレーズは少し力強く新緑の緑色、さらに変ロ長調はヤマブキの黄色と緑色等々・・・でもなぜテレマン先生は Allegro を指定？あ、幼子がちょこちょこ歩いている感じかも！・・・試行錯誤の練習が続きました。皆様に想いが伝わりますように！(原島)

第2部

9. ジョスカン・デ・プレ：ジョスカンのファンタジー／あなたに会うと
J. des Prez (1455~1521) : Ill fantazies de Joskin / Quant je vous voy

Tn. 堀あゆみ Bs. 森田彰子 Bs. 宅間かおり

ジョスカン・デ・プレはルネサンス期にフランスを中心に活躍した作曲家で、声楽家でもあります。2曲目に演奏する〈あなたに会うと〉は声楽のための曲です。同じルネサンス期でもオルティスから60年ほど遡る事になり、この頃はまだディミニューションの技法がなかったり、またミーントーンの響きの再現を試みたりなど、いろいろ学ぶことができました。

ジョスカンの曲はこの2つ以外知らないのではっきりとは言えませんが、シンコペーションと自由な変奏に彩られたオルティスの曲達に比べ、軽やかな和音であると同時に意外なほど劇的でもあり、長短を揺らぐ感覚が弾いていて心地よいです。60年の時代の開きだけではなく、影響を受けた地域の違いによるものでもあると思います。この辺りをもっと深く勉強したいです。コンソート初心者の方のたくまにお付き合いいただき、堀さん、森田さんには感謝しかありません。(宅間)

10. J. ダウランド：ラクリメ・アンティカ
J. Dowland (1563~1626) : Lachrimae antiquae

Tr. 山崎香 Tn. 松田祥子 Tn. 堀あゆみ Bs. 米山水浦 Bs. 市川雅敏、青木良枝

ダウランドはエリザベス朝後期にイングランドで活躍した作曲家で、優れたリュート奏者でもありました。当時大変人気のあった自身のリュート歌曲〈流れよ我が涙〉を7曲の器楽曲に編曲し、《ラクリメ 7つの涙》という曲集にまとめています。〈ラクリメ・アンティカ〉はその一曲目にあたります。歌の旋律とそれを膨らませる伴奏で構成されており、冒頭の4音は“Flow my tears”の歌詞で歌われる部分であり、あふれて流れ落ちる涙の描写になっています。

- ミコ：4声のパヴァン第4番
R. Mico (1590~1661) : Pavan a4 No.4

Tr. 市川雅敏 Tr. 山崎香 Tn. 松田祥子 Bs. 米山水浦

リチャード・ミコはダウランドより30年ほど時代をくだるイングランドの作曲家で、多くのコンソート曲を書きましたが、生前に出版されたものではありませんでした。明るく静謐なテーマで始まり、模倣対位法で各パートが対等に絡みあう器楽的な作品です。

- ウォード：5声のファンタジア第7番
J. Ward (1571~1638) : Fantasia a5 No.7

Tr. 市川雅敏 Tr. 山崎香 Tn. 松田祥子 Tn. 堀あゆみ Bs. 米山水浦

ジョン・ウォードはダウランドと同時代のイングランドの作曲家で、マドリガル作品にも優れていました。このコンソート曲でも歌うような旋律を和声豊かに展開させながら、跳ねるように、うねるようにと様々な質感を生み出しています。(以上3曲、山崎)

11. マレ：トリオ ホ短調

M. Marais: Pièces en trio en mi mineur

Prélude / Rondeau / Sarabande En rondeau / Menuet / Passacaille

Rec. 山本多喜子 Rec.大鶴扶美 Vdg. 森田彰子 (Cem. 辛川太一)

マレは 1676 年にガンバ奏者として宮廷音楽家となり、ほぼ生涯を通して、その立場にあり、多くの曲を作りました。最初に出版されたガンバ曲集は 1686 年、第 2 集は 1701 年ですが、その間に 1692 年にこのトリオ集、1693 年に最初のオペラ《アルシード》と、ガンバ曲集とは異なる、宮廷で演奏される多くの曲が作られています。

このトリオ集は、様々な楽器で演奏されますが、どの楽器の組み合わせでも、それぞれの面白さを感じられます。今回は 2 本のリコーダーとガンバ、チェンバロでやることにしましたが、ガンバも呼吸（いき）を合わせて演奏します。6 つあるトリオの、第 5 番の中から、堂々としたプレリュード、小粋なロンドー、スペイン風サラバンド、短いメヌエットに続いて、壮大なパッサカーユを演奏します。（森田）

12. アーベル：ソナタ ホ短調

C. F. Abel (1723~1787): Sonata e-moll AbelWV B39

Siciliana / Allegro / Presto

橘直貴 (Cem. 辛川太一)

アーベルの作品番号 B36 から B39 はいずれもベルリン王立図書館に自筆譜の形で、二つはチェロのための、もう二つはガンバのためのソナタとして残されています。これらの作品群に共通しているのは、遅一速一速という楽章の形式から成っていることです。アーベルが 1782 年、ベルリンとポツダムにてヴィルヘルム・フリードリヒ皇太子のもとを訪れた時に携えた作品のためこれらはプロイセンソナタ(Prussian Sonata)、もしくはベルリンソナタとも呼ばれるようですが、この一連のソナタのもう一つの特徴は、遅いテンポによる最初の楽章に様々なキャラクターによる様式が用いられており、今回挑戦するこの B39 は、シチリアーナで始まるのが特徴です。この揺らぐリズム感と儚さ、そのための弓の使い方、拍の重さ軽さを表現することに苦勞しました。続くアレグロはロンバルディアのリズムやアーベルならではの分散和音が特徴の音楽、最後のプレストの楽章は、テンポの速い楽章というよりは、この言葉の語源から想起される、押し出されるように前に進む音楽にも感じられます。（橘）

13. マレ：組曲 へ長調（第 5 巻より）

M. Marais : Suite en fa majeur

Prélude / Allemande la bois Guillaume / Sarabande / Idée Grotesque - Double de Lidée Grotesque

松田祥子 (Vdg. 米山水浦 Cem. 辛川太一)

マレの曲集は、巻が下るにしたがって標題付きの自由な曲が多くなっています。今年は 5 巻へ長調の組曲から、プレリュードと舞曲に続けて、そんな標題曲をひとつ取り上げてみました。

「グロテスクな考え」 一風変わった曲名で興味を惹きますが、演奏してみると、現代日本語での感覚とは異なる軽やかで明るい曲調に肩透かしを食わせられます。「グロテスク」とは時代や文脈で多様な意味があるようですが、ここでは「一風変わった」「普通でない」くらいの意味合い？転じて「ちょっと変わった人」をイメージして取り組んでみました。

音域が低く渋めの曲が多いですが、「鍛冶屋」「クラヴサンのタッチ」など、面白そうな曲名が並んでおり、いぶし銀のような組曲です。（松田）

14. マレ：組曲 ニ長調（第3巻より）

M. Marais : Suite en ré majeur
Prélude / Sarabande / Gavotte

池部裕子 (Vdg. 堀あゆみ Cem. 加納文子)

今回は短い曲を3曲だけ選びました。テクニク的な難所はあまりないと思いますが、聴いている人たちの心に響く演奏ができたらなあ、と練習してきました。

Prélude : 歌劇でのモノローグをイメージし、心の声を情感こめて歌います。以前この曲のレッスンを見学した際、先生の演奏するフレーズがあまりに美しくて受講者と一緒に涙した記憶が……。涙させる謎を追求中。**Sarabande** : ラテンアメリカ起源でスペインに渡った、もともとは速いテンポだったサラバンド。卑猥とまで言われたこの舞曲は、フランス宮廷ではゆっくりとした荘重な雰囲気のものとなりました。**Gavotte** : 奏者みんなで、エレガントに可愛らしく踊ります。(池部)

15. サント＝コロンブ：〈ラポルテ（五線譜）〉（《2つのヴィオルのための合奏曲集》より）

Sainte-Colombe (c.1640~c.1700) : Concert n° 48 en sol mineur « Le rapporté » dans *Concerts à deux violes esgales*

Le rapporté / La belle passacaille du rapporté / Chaconne rapportée

山根 健一 市川 雅敏

サント＝コロンブは、17世紀後半にフランスで活躍したヴィオール奏者です。宮廷音楽家ではなかったため、実名や生年などの詳細はわかりませんが、門人にマラン・マレやメリトン氏など有名ヴィオール奏者がおり、二人の娘と共に音楽会を催していた、6弦だったヴィオールに7弦目を加える発明をした、などの逸話が残っています。

作品としては、67曲の《2つのヴィオルのための合奏曲集》や177曲の独奏曲が筆写譜として残されており、今回は《合奏曲集》から第48番の合奏曲〈ラポルテ〉を演奏します。曲名は筆写者が「私がこれを爪弾き用タブ譜の一部から五線譜に転写したため」との注釈を残しています。彼の曲全般に言えますが、演奏には高度な技術を必要とし、拍を無視した装飾的な旋律、旋律と和声が無機的に結びついた余情的な曲想、彼が発明したとされる第7弦を旋律に多用、といった特徴があります。(山根)

第3部

16. L. クープラン (c.1626~1661) : ファンタジー／第2ファンタジー／クープラン氏によるヴィオルのためのファンタジー／クープラン氏によるサンフォニー

L. Couperin : Fantasia / Autre Fantasia / Fantasia pour les Violes par M^r. Couperin / Simphonie par M^r. Couperin

Tr. 砂川巴奈歌 Tr. 市川雅敏 Tn. 堀あゆみ Bs. 井上樹 Bs. 山根健一

2026年はルイ・クープラン（以下、ルイ）生誕400年です。現パリ市庁舎の東側広場にあるサン・ジュルヴェ教会はクープラン家が代々オルガニストを務めた教会で、1653年にルイが就任したのが始まりでした。彼は鍵盤楽器奏者にとどまらず、宮廷ではヴィオルの最高音部を担当していたと言われています。キャリアがわずか10年ほどであったことや楽譜出版も行われなかったことから、200曲以上にのぼる彼の作品の大部分は、鍵盤楽器の作品を収めた3つの写本によって伝えられています。そして、そのうちの9曲は弦や管のためのアンサンブル作品として書かれています。

オールダム写本所収の **Fantasia / Autre Fantasia** はそれぞれ、1654年と1655年に作曲されたことが楽譜に記されています。拍子と書法が目まぐるしく入れ替わり、フランス風序曲のような堂々とした劇場風の音楽です。オルガン作品の番号が付されていることから、オルガンでも演奏されたことが考えられます。

ボーアン写本所収の *Fantasia pour les Violes par Mr. Couperin / Simphonie par Mr. Couperin* は、曲名に「ヴィオールのための」や、鍵盤作品と区別する際の用語「サンフォニー」という文言があるように、アンサンブル作品であることが明示されています。この 2 曲は元々、最高音部とバスパートの 2 声で書かれており、ルイ自身がドゥシュ・ド・ヴィオルで演奏したことが想像されますが、ところどころに通奏低音の数字や内声パートが挿入されていることから、4~5 声部の楽曲としても演奏可能です。17 世紀後半のフランスでは、ファンタジー、舞曲、サンフォニーのような器楽作品はしばしば、対位法的な動きを特徴としないことから、内声部を作曲していない、最高音部とバスをみの縮約版の楽譜で伝えられていました。本日は、M. シールによって内声部がリアリゼーションされた楽譜で演奏します。(砂川)

17. カステッロ：ソナタ第 2 番
D. Castello (生年不明 ~ c. 1630): Sonata II

Vn. 長谷川悠 Vdg. 長谷川明子 (Cem. 辛川太一)

この作品は、1692 年に出版された《現代的で協奏的なソナタ集 第 2 集》に収められています。「ソプラノ独奏楽器と通奏低音のためのソナタ」とされており、明確な楽器の指定はありませんが、多くは、ヴァイオリンで演奏されています。

楽曲は哀愁を感じさせるメロディから始まり、激しい緩急を伴って音楽が進んでいきます。それはまるで感情が激しく揺れ動く様子を表現しているようです。終盤に向けては、16 分音符や 32 分音符をときには嵐のように、ときには天使のはねのように奏でます。特に、ヴェネツィア特有のエコー効果やトリルが多用されており、演奏者の限界を試されるような展開になっていると言えるでしょう。

(長谷川明子)

18. アーベル：ソナタ ト長調
C.F. Abel: Sonata G-dur AbelWV B87
Adagio / Allegro / Vivace

藤崎広大 (Cem. 辛川 太一)

ガンバ弾きにとっては避けては通れない存在であるアーベルですが、今回初挑戦になります。2015 年にレーデンプルク城の遺品から発見された 3 つのガンバ・ソナタからト長調を演奏します。C.P.E. バッハの作風のような多感様式が色濃く見られ、明確な対比が特徴的な作品です。ゆったりしてお気楽な曲調の第 1 楽章、活発で疾走感あふれる第 2 楽章、そして優雅なメヌエットの第 3 楽章と、全くキャラクターの異なる全 3 楽章のソナタをお届けします。第 1 楽章のカデンツァはこの解説文を書いている時点では未だできておらず、本番までどうなるか全く分かりませんが、リラックスして聴いていただける演奏を目指します。(藤崎)

19. テレマン：トリオ ヘ長調 (《音楽の練習帳》より)
G. P. Telemann (1681~1767) Trio aus *Essercizii musici* TWV42: F3
Vivace / Mesto / Allegro

Rec. 原田都恵 Vdg. 米山水浦 (Cem. 平田恵)

2 曲目の *Mesto* にはイタリア語で「悲しげな」「憂鬱な」「ふさぎ込んだ」という意味を持ち、ラテン語の「*Maestus* 悲しみに沈んだ」を語源とします。音楽用語では「もの悲しく」「沈んだ悲しみ」を表します。他にも悲しみを表す音楽用語の一例として、テレマンのリコーダーソナタへ短調 (TWV41:f1) の 1 楽章に記されている「*Triste* 悲しく」がありますが、比較的ストレートな悲しさを表す *Triste* に対し、*Mesto* は涙を流すエネルギーすら枯れ果てた静的で内向的な哀しみを示唆しているようです。僅か 10 小節の *Mesto* ですが、今年早咲きの白梅の蕾がほころびる頃、足速に旅立ってしまった恩師を偲び、演奏したいと思います。(原田)

20. F. クープラン：ヴィオール組曲 第1番 ホ短調
F. Couperin (1668~1733) : Première suite en mi mineur
Prélude / Allemande Légère / Sarabande Grave / Gavotte

砂川巴奈歌 (Vdg. 井上樹 Cem. 辛川太一)

1728年に出版されたクープレンの二つのヴィオール組曲は、第1番がフランスの伝統的な組曲の形式をとり、第2番は自由な形式の4つの楽章が並ぶイタリアのソナタの形をとります。このことから、二つの組曲全体としての特徴は、フランス趣味とイタリア趣味を一つの音楽の上で公平に扱った《趣味の融合》の続編とも言われます。

第1番のプレリュードは、歌詞のない歌のように作曲されていると、かねてから感じています。フランス語の歌において、女性韻（語尾が e や es で、語尾の一つ前の音節にアクセントが置かれる）の脚韻につけられる音型には、ティエルス・クレを伴う3度下行がよく用いられます。フランス詩では16世紀以来、この女性韻と、それ以外の男性韻と呼ばれる脚韻を交互に配置するのが良いとされてきましたが、このプレリュードでも女性韻の音型とそれ以外の音型がフレーズの終わりに比較的バランスよく散りばめられている点に、クープレンの詩への志向が感じられるのです。（砂川）



21. マレ：組曲 ト長調（第2巻より）
M. Marais : Suite en Sol majeur
Prélude / Allemande / Sarabande la désolée / Chaconne en Rondeau

堀あゆみ (Cem.加納文子)

マレの組曲集第2巻に収められているト長調の作品は、非常に若々しい躍動感と豊かなエネルギーに満ちています。プレリュードは歌うような序奏から軽快で器楽的な展開へと進み、しばしばみられる転調やゼクエントが多彩な表情を生み出します。

威厳あるアルマンドに続くサラバンドでは、長調の響きの中に深い哀感が漂い、胸に染み入るような哀しみを表現しています。一変し終曲シャコンヌでは、道化師の踊りを思わせる主題が繰り返され、万華鏡のように多彩なパッセージが広がっていきます。（堀）

22. ジェンキンス：2つのバスヴァイオルと通奏低音のためのパヴァン／ファンタジア／ディヴィジョン
J. Jenkins (1592~1678): Duos for Two Bass Viols and Continuo
Pavan / Fantasia / Divisions on a Ground

米山水浦 市川雅敏 (Cem. 平田恵)

ジェンキンスは、17世紀イングランドで、チャールズ一世・大空位・王政復古と激動する三つの時代に渡り活躍した音楽家です。パヴァン (Cambridge, King's College, Rowe MSS 112-113) の手稿譜の旧蔵者であるジョン・ブラウンは、議会事務総長を務めた人物で、熱心な音楽収集家でした。有名な4声、6声のパヴァンに並ぶ、格調高い気品に満ちた作品です。ファンタジア (DURHAM-CATH-MS-MUS-D2-36) の手稿譜はダラム大聖堂の所蔵で17世紀の重要なコレクションの一つです。4つの部分からなる自由な形式で、中間部では2声が激しく競り合う対位法が展開されます。ディヴィジョン (Oxford, Bodleian Library, MSS Mus. Sch. C.59-60) の手稿譜の旧蔵者であるフランシス・ウィジーは、著名なヴァイオル奏者・写譜家でした。16世紀イタリアのヴィオラ・バスタルダの音楽様式を反映した2声の軽やかな「対話」が魅力です。終盤に向けて超高音域に渡る超絶技巧の速いパッセージが繰り返されます。（市川）